

宮脇晴・綾子夫妻のひとと作品について

——福本まさ子氏へのインタビュー——

成瀬美幸

豊田市美術館では愛知県の油彩画家・宮脇晴（1902-1985）と、その妻で創作アプリケ作家の宮脇綾子（1905-1995）夫妻の作品を所蔵している。宮脇晴は、十代で大沢鉦一郎と交友し「愛美社」結成に参加、18歳で帝展に入選し、その後春陽会会員として名古屋で活動した画家である。加えて高校の美術教諭として多くの後進を育てた教育者でもあった。妻の綾子は40歳を過ぎてから制作活動を始め、古い布を用いた創作アプリケが国内外で評価を受けた。その見立ての斬新さと素朴な美しさに溢れた彼女の作品に、今なお魅了される人は多い。

当館の宮脇夫妻作品のコレクションは、すべて作家並びにご遺族からの寄贈によるものだが、2010年度はこれに宮脇晴作《パッチワークの女性像》の油彩画1点と、かごに入った蟹のスケッチ1点が加わった。宮脇晴に長年師事し、《パッチワークの女性像》のモデルでもある画家・福本まさ子氏からの寄贈である。

筆者が福本氏からモデルになった経緯や生前の宮脇晴と綾子について最初にお話を伺ったのは2010年6月。話題は2点の作品にとどまらず、晴から受けた指導や綾子の制作スタイル、夫妻の人柄、作品の制作背景まで広がっていった。発言の一つ一つからは、今もって思慕の情を寄せる宮脇夫妻について知っていることを伝え残したいという思いが伝わってきたのである。

2011年11月、改めて福本氏に、氏が参加していた「かようぞく」や、晴の作品のこと、いつも二人一緒だったという宮脇夫妻についてうかがった。「かようぞく」は、晴が自宅のアトリエで指導していたアマチュアの絵画グループの名称である。毎週火曜日の夜7時に開いていたこともあり、参加者の多くは仕事を持つ女性で、アマチュアとはいえ絵を描くことに真剣に取りくむ者の集う場であった。福本氏は、名古屋弁の抑揚のあるイントネーションで明瞭に、彼女から見た「晴先生」と「綾子先生」の日常の姿や、仲間たちとのエピソードを生き生きと語られた。

本稿は2010年6月と2011年11月の二回の記録をまとめたものである。福本氏の話は、氏が絵を学び始めた1960年代前半から宮脇晴が亡くなる1985年までの、宮脇夫妻のほぼ老年期にあたる。インタビューは筆者、記録は西崎紀衣がおこなった。ここでは、二回にわたり聴き取った内容を適宜編集して掲載する。

一宮市のお宅までうかがうと申し出ても、福本氏は「いえ、豊田市まで行きます。高速使えばすぐですから」と明快に言い、愛知県を西から東へと車で元気に運転してくる。話のなかにも、昭和という時代を象徴するような活動的な女性たちが登場する。彼女たちに囲まれた宮脇夫妻の姿は、作家自身の残した言葉や文章を通してみた作家像とはまた異なる印象を受けるものであり、在り様そのものが教育者ではなかったかと興味深い。

「かようぞく」の話

—— 福本さんが宮脇晴さんに習い始めた時期を教えてください。晴さんはもう名古屋市立工芸高校の先生を退職されていませんか。

福本 私が20、21歳頃だったかなあ。今69歳ですから、47、8年前、1963年頃ですか。

—— 高校退職は1962年ですから。

福本 退職直後くらいですね。あの当時の写真を久しぶりに見たら晴先生が若々しくてびっくりしました。私が通っていたのは「かようぞく」というグループなんです。今から思うと本当に素晴らしいメンバーばかりでした。晴先生のご自宅でやってらっしゃった。

—— 「かようぞく」はいつ頃から始まったんですか。

福本 私が紹介されて行ったときにはもう始まっていたんですよ。おそらく退職されてから本格的にやっておられたんじゃないかなと思うんですけどね。

—— 「かようぞく」というお名前は。

福本 私が行ったときにはもうついていました。毎週火曜日夜に行くもんだから「かようぞく」。もう何十年と通いました。メンバーの佐分妙さんは、画家の佐分眞が伯父にあたる方で医者ですね。中野ふみ子先生は金城学院の体育の先生で、浦川美枝先生は一宮高校の先生で。長谷川澄江さんは会社員でした。

—— 皆さん特に美術の先生というわけではなかったんですか。

福本 ええ、みんな趣味で。春陽会に出したのは生徒のなかでは私ぐらいで。大体、先生は公募展やいろんなところに出品しない、なんて一切言わなかった方なんです。春陽会に勧誘しようなんて気は全然ないですからね。私も出す気なかったし、ただだ絵が好きで。私は若い頃は旅に出るのが好きで、札幌に身内がいたもんですから北海道に半年とか一ヶ月とか出かけていってユースホテルに泊まって絵を描いて歩いていて。あるとき現場で描いてきた絵を持って行って先生に見せたら、「これを大作にして春陽会に出したらどうですか」と言われたのが、「かようぞく」に入ってもう10年近く過ぎたあとなんですよ。初めて絵を見てそう言われて春陽会に出品したのが最初です。他の方は一水会だとか光風会とか、それぞれ自分で決めて出していましたね。それも先生はいいとも悪いとも何にもおっしやなくて。そんな感じの先生でしたから、本当に純粋に絵画好きな仲間が集まって、先生が動けなくなる直前まで続きました。

—— 「かようぞく」のメンバーはずっとかわらなかったんですか。

福本 いえ、何人か入れ替わりはありました。亡くなってやめた方もいますね。古くからいて最後まで残ってたのは、私と、佐分先生と浦川先生と長谷川さんぐらいと、後からはいつか来た数名ですね。

—— 月謝などはありましたか。

福本 月謝というか会費ですね。初めからずっと裸婦のモデルでしたから、その

モデルさんの費用をみんなで割って。だから先生には月謝は入ってなかったと思います。ただみたいな値段でしたね。綾子先生が休憩時間になると下からお茶とかお菓子とかいろいろものを持って2階に上ってきて。綾子先生は一切アトリエに入っていないですから。本当に裏方にまわって、階段に「はあい」と茶菓を置いたらさっさと降りていかれる。描いてるところを邪魔しませんでしたね。

— 1回で何時間ぐらい描いたんですか。

福本 モデルさんを使っているので、5分とか10分とか休憩を入れてトータルで2時間。クロッキーとか油絵とかやりました。1回目はクロッキー。3分とか5分とかっていう感じで。後の2、3、4回は油絵で固定ポーズ。木炭でやりたい人はやる。描いた油絵は途中で毎回引きあげて、火曜日になると持ってきました。

— 同じモデルを使っていたんですか。

福本 ええ、モデルさんは続くときはずっとその方でした。一番長く続いたのは林さんというモデルさんで、雰囲気があってみんながとても気に入ってたんです。その方が来れないときは違うモデルさん。最後の方では林さんが結婚して来られなくなったので、モデルを探すには大分苦労しましたけどね。でも最後まで裸婦のモデルをなんとか確保しながらやってきましたね。

— 「かようぞく」は何人まで、とか決まりはあったんですか。

福本 とにかくお部屋に入るスペースに限りがあるんで、あんまり大勢入れないんですよ。大体誰も勧誘しませんからね。増えたら困るもんだから、知らせまいという思いがみんなあるんで。だから、入りたがってる人を断ったって話も聞いたことないし。私はラッキーだったんだわね。秘密の穴蔵でしたから。

— 大体いつも同じような人数ですか。

福本 そうです。たまに休む方がいたりしても、普通の部屋ですから早く行かないといい場所取れないですからね。遅く行くと描いている人の隙間からモデルさんを見なきゃいけないから。5、6人でもいっぱいでしたからね。イーゼル立てて、モデルさんの目の前で描いてました、かぶりつきで。

— 受験生で来られる方はいるんですか。

福本 いなかったですね。大体私たちそういうアンテナ張らないから。

— どなたかがお止めになったときに入れ替わりはあったんですか。

福本 ないです。まあ一人ぐらいいいだろうと見計らって、あの人なら、と言う人を誰かが連れてくるんですね。晴先生はそれを受け入れるだけ。いやとかいいとか何にもおっしゃらないから。阿吽の呼吸でみんなやってきましたね。

スケッチ旅行の話—福本氏持参の写真の話

福本 写真を探したんですけど、晴先生がカメラを持っていて私たちを写すので、ほとんど先生が写ってないんですよ。



図1 1976年2月 新潟県妙高 綾子



図2 1975年7月 岐阜県奈良井宿 晴

